

ヘンリー・ジェイムズの作品におけるテーマとその形象化

三輪 誠 一

1

作家が作品の執筆をはじめるとき、彼の胸中にはまずその作品にもりこむあるテーマがあるはずである。ある抽象的思想、あるいは観念が作家の創作活動を促す場合もあり、またある場合には、具体的事件の直接の経験が作家にテーマを着想させ、創作意欲を呼び起すこともあり得る。これは何れの作家にも共通な創作における経験であり、また習慣でもある。このことに関して日本の現代作家の一人と、外国作家の一人を例として取りあげ、彼らの創作活動の実態を見ることにする。

まず日本の現代作家、大岡昇平の作品制作について彼自身の経験を語るエッセイの中から、その一部を抜粋する。

「新聞記事、他人の書いた随筆、夢などからヒントを得ることもあれば、東西の作家の書いた作品からヒントを得ることもある。」と彼は言う。ここで彼がヒントと言うのは、夢を別とすれば彼自身の経験的事実や心理的経験ではなく、他者の経験を通して間接に知り得た抽象的観念、あるいは他作家の作品のテーマの中、特に彼の興味を引いたものを言うのであろう。次に外国作家として、Henry James の例を引く。外国文学作品、特に英文学作品の中で長篇、短篇を合わせて彼の作品を比較的多く私が読んできたということ、それと James(1843—1916)の死後30年をへて1947年に彼の残した創作ノート (*The Notebooks of Henry James*) が出版され、これが彼の創作心理や創作行為のプロセスを知るために興味深い文献であるという理由からである。彼のこの創作ノートには、長篇小説を含めて多くの短篇小説の創作の動機と作品制作のプロセスが記録されている。その中には彼の脳裡に浮んだ抽象的観念、具体的な story の荒筋の二種類の記入がある。前者は作家としての彼の日常生活の中で、ある時彼の胸中に浮び、

そのまま彼の記憶に定着した観念 (idea) である。後者は彼の友人、知人を通して聞いた小事件、彼が出席した party において話題にのぼった世間話などである。彼はこれらの中で作家として興味があると判断したものを選び、メモとして習慣的に創作ノートに丹念に記入した。これらのメモは彼が作品の germ (胚種) と呼んだもの、すなわちやがて彼の創作行為を通して具体的な物語となった作品の芽生えである。ある観念が形象化されて一篇の短篇作品となった例を示して彼の小説美学の一面を見たいと思う。彼のノートの中から二例を引用する。

It has often occurred to me that the following would be an interesting situation, a man of certain age (say 48) who sees a certain situation of his own youth reproduced before his eyes and hesitates between his curiosity to see at what issue it arrives…… and the prompting to interfere, in the light of his own experience, for the benefit of the actors.

(Dec. 12, 1878)

What is there in the idea of Too late—— of some friendship or passion or bond—— some affection long desired and waited for, that is formed too late?—— I mean too late in life altogether. Isn't there something in the idea that two persons may meet…… only in time to feel how much it might have meant for them if they had only met earlier?

(Feb. 5, 1895)

上記のメモはもう少し長い、その冒頭の部分、物語の plot, テーマ, situation 等を引用したものである。引用文の前者は “The Diary of a Man of Fifty”, 後者は “The Beast in the Jungle” として作品化され、それぞれ1879年および1903年に発表された。

1895年2月5日の日付の創作ノートと対照しながら、作品“The Diary of a Man of Fifty”の物語の概略をまず述べる。これはある中年の英国人（元英国陸軍の将軍）が、27年前に若き陸軍士官として駐在したイタリアのFlorenceを訪れ、この地で昔自分が経験した恋愛と全く同じ恋愛事件が一人の英国青年の身に起きているのを知り、自分の過去の経験からみて、これが必ず不幸に終る恋愛であると予測し、これに介入して当人たちを不幸から救い出そうと考える。これが大体のプロットである。中年の英国人の恋の相手はイタリアのSalvi伯爵夫人（未亡人）、英国青年Stanmerの恋愛の相手はScarabelli伯爵夫人（未亡人）。偶然にも、Countess SalviとCountess Scarabelliとは母と子という親子関係をもつ。なお意外なことには、この二人の貴婦人は若くして未亡人となった美貌のイタリア女性、母親のSalvi夫人はすでに故人となった過去の人。したがってこの小説の中で活動するのは、中年の英国人、英国青年Stanmer、若く美しいScarabelli夫人の三人であり、Salvi夫人は作品の中の重要人物であるが、中年の男の回想の中においてのみ生きている過去の人物である。この小説はこの男によって書かれた日記という形式を用いた一人称の小説である。小説の主人公はこの日記の筆者である。物語はこの無名の日記の筆者「私」によって語られる「私」の恋愛の思い出の物語であり、英国の青年StanmerとScarabelliの現在進行中の恋愛物語である。「私」の恋はSalvi夫人の性格に対する「私」の疑惑と不安、最終的にはSalvi夫人をcoquetteとみなした「私」の早過ぎた判断、あるいは「私」の誤解によって終りを告げる。

「私」はStanmerに対して自分の経験を語り、彼のScarabelliとの結婚について自重するよう警告して彼と別れたが、この二人はその後まもなく結婚した旨を「私」に報告する。この時から三年後、「私」は偶然Londonのある夫人の邸宅においてStanmer夫妻に会い、二人が幸福な夫妻であることを知る。別れ際にStanmerは「私」に言う。“Depend upon it you were wrong. Wasn't it rather a mistake?” Stanmerは「私」のSalvi

夫人についての判断とその後の私の行動が誤りであったこと、また彼とScarabelli夫人との結婚についての「私」の予測と警告が誤りであったことについて語ったのである。それから三日後、「私」は日記に次のように記す。

Was I wrong — was it a mistake? Was I too cautious — too suspicious — too logical? Was it really a protector she [Countess Salvi] needed — a man who might have helped her? Would it have been for his benefit to believe in her, and was her fault only that I had forsaken her? Was the poor woman very unhappy? God forgive me, how the questions come crowding in! If I marred her happiness, I certainly did not make my own. And I might have made it — eh? That's a charming discovery for a man of my age.

「私」はここで日記の筆をおく。

上記の日記の末尾は小説の主人公「私」の独白である。この日記の冒頭の部分は末尾と同様に小説の主人公「私」の独白で始る。それを下記に記す。それは主人公がFlorenceを再度訪れた日の彼の感慨である。

They told me I should find Italy greatly changed; and in seven-twenty years there is room for changes, But to me everything is so perfectly the same that I seem to be living my youth over again; all the forgotten impressions of that enchanting time come back to me.

これに続いて「私」はCountess Salviとの激しい恋が不首尾に終る恋であったことを回想する。

I suppose that, whatever serious step one might have taken at twenty-five, and however one's conduct might appear to be justified by events, there would always remain a certain sense of loss lurking in the sense of gain; a tendency to wonder, rather wishfully, what might have been. 上記の文中のgainの意味は英国陸軍の高官の地位に昇進し、軍人としての任務を十分に果して無事退官することを得た「私」の半生を指し、lossとはCountess Salviを失ったことを指すのである。独白はさらに続く。Why, for instance, have I never married — why

have I never been able to care for any woman as I cared for that one [Countess Salvi] ?

主人公の胸中には現在の小さな幸福を楽しむ感情と共に今なお残るほろ苦い一抹の悔いがかみかえる。これは小説の末尾の独白の中で自分に問いかける疑問と呼応する。“The Diary of a Man of Fifty”は、人生の“What has been”（現実）と“What might have been”（仮想）とを対比し、予測を許さぬ不安定な人間の運命——a familiar kind of Jamesian regretをテーマとしたJames初期の作品の一例である。

3

“The Diary of a Man of Fifty”の発表（1879）の24年後、同じテーマの作品“The Beast in the Jungle”が制作される。作品の荒筋は次のような単純なplotの短篇である。登場人物は二人の男女、John MarcherとMay Bartramである。イタリア見物の一団の人々にまじりSorentoを訪れた時、それまで互に未知であった二人は、旅の途上の気軽な会話を交わす。これが二人の最初の出合いである。二人はそのまま別れて再び相合うこともなく、十年の月日が流れ去る。しかるに二人は英国のある富裕な家族のcountry houseでもよおされたpartyで十年振に出合う。この時Mayはイタリア旅行中の二人の偶然の出合いの思い出を語る。彼女は十年前に彼が語った奇妙な言葉を今も覚えていると言う。彼はそれを全く忘れていたが、彼女の回顧談によってそれを思い出す。彼女は記憶に残る彼の言葉をくりかえしてみせる。

“You said you had had from your earliest time, as the deepest thing within you, the sense of being kept for something rare and strange, possibly prodigious and terrible, that was sooner or later to happen to you…….”

その後Mayは伯母の死によってその遺産の一部を与えられ、London市内に適当な住宅を得て移り住み、この時から彼女と彼との長い交際が始まる。作者JamesはMayをきわめて温順で内気な女性として性格づける。Marcherには、ある奇妙な観念——彼の人生には何か異常な事件が起ることを期待するという固定観念にとらえられた男、monomaniac, egocentricの性格を与える。彼の空想する

something rare and strangeとは、具体的な言葉で説明するにはむづかしい、それは漠然たるある物、ある事件に過ぎない。Mayは彼のいわゆるsomethingの出現を彼と共に待ちましょ、と約束する。作者はMarcherがその出現を期待するものを“The Beast in the Jungle”（密林の野獣）と名づけ、象徴的に小説の表題とした。二人の男女の交際はその後何等特別の変化もなく続く。この間Mayは彼に対して献身的な、深い愛情を抱きつづける。ある時Mayは彼女の真情を暗示的な言葉で彼に伝え、それを彼に理解させようと試みる。しかし奇妙な固定観念にとらわれているMarcherはそれを理解できない。Mayは失望するが、彼に対しては変らぬ愛情をもって交際を続ける。このような状況の中に歳月は流れ去り、二人は次第に中年の年齢に近づく。ある日MarcherがMayを訪問した時、彼女は自分の健康がとにかく衰えはじめたことを告げる。彼はおどろき、且つ不安を感じる。従来彼のMayに対する関心は、一人の市民人としての友人、好意をもって彼の話を聞いてくれる話相手として応対する単純な興味以上の何物でもない。二人の友情——実は魂の触れ合いを欠いた単なる交際は、彼女の死と共に消滅する。彼女の死後、彼は彼女の墓石の前に立つが、墓石は彼に何事をも語りかけない。彼と共に待とうと彼女が約束したsomethingは、彼にも依然として不明である。その後彼は長い外国旅行に出かけ、東洋の各地を巡歴するが、彼の予測する人生のsomethingには、いずこにおいても遭遇することなく、空しく帰国する。彼の持つ奇妙な固定観念は、時折彼の意識に浮ぶが、話相手を失った彼の孤独感は深まるばかりである。彼は気晴しのため、毎月一度Mayの墓を習慣的に訪れる。ある秋の日、彼はMayの墓を訪れた時、近くに新しく造られた墓の前に立つ一人の未知の中年の男を見る。その顔は愛する人を失った悲哀と痛恨をあたかも深い傷痕の如くはっきりと示している。これを見てMarcherは感動する。この時彼は初めて人間の持つ悲しみというものを理解する。突然彼の脳裏にMayの生前の姿が浮ぶ。健康が衰え始めたMayが、愛の暗黙の告白をした時、彼はそれを理解し得なかった。それを察知して彼女が示した失望の色、彼女のもらした言葉——

“It’s never too late”. 彼女の死期の近い頃、彼女との最後の対話の中で彼の聞いた言葉——“I would live for you still, if I could.”…… as if she were for a last time trying, “But I can’t !” she said as she raised her eyes again to take leave of him. これらの image が彼の脳裏に閃光のようによみがえる。彼の取り逃したもの、失ったもの——それは May その人であり、その愛であったことを彼は初めて自覚する。

The escape [from his doom] would have been to love her ; then, he would have lived, She had lived,…… since she had loved him for himself ; whereas he had never thought of her …… but in the chill of his egotism …… Her spoken words came back to him —— the chain stretched and stretched.

次の引用文はこの小説の最終部分の数行である。

He saw the Jungle of his life and saw the lurking Beast …… rise, huge and hideous, for the leap that was to settle him. His eyes darkened —— it was close ; and, instinctively turning, in his hallucination, to avoid it, he flung himself, face down, on the tomb.

James は Marcher の人生と、彼がその人生の未来に予測した something とを、それぞれ “Jungle”, “Beast” の二語をもって徴象し、この二つの象徴を、小説の最後の場面の精緻で生動的な描写によって具象化したのである。

4

次に二つの小説, “The Diary of a Man of Fifty” と “The Beast in the Jungle” の形式と内容表現効果の比較を試みたい。前者は日記の形式による一人称小説であり、後者は客観的な三人称小説であり、表現形式を異にする。しかし両者の主人公が自分の過去の経験を回想する時点で小説が終り、彼らの半生の反省が後悔 (regret) であるという点では、両作品はそのテーマにおいて同一である。しかし作品が読者に与える印象、感銘は、その強弱の程度、あるいはその性質においていちじるしく異なる。読者は両作品を一読することによって、その相異に容易に気付くはずである。無名

の日記の筆者の心情は淡白な心残りとも言うべきものである。そこには苦渋にみちた暗さはない。これに反して Marcher の追憶と反省は暗黒な苦悶の内部世界である。Mercher の自覚したものは、彼の犯した過失を認めたということよりは、むしろ彼がその egotism の故に犯した罪の確認であり、それ故に受ける罰への恐怖であり、浪費された半生を追認しなければならぬ故の絶望感である。かくして彼は恐しい幻覚におそわれ、May の墓石の上に身を投げる。「もしかしたらあり得たかも知れぬ別の人生」、「しかし余りにも遅過ぎた認識」、というテーマを具象化した二作品は、plot の相違は別として、一方の作品の終局は、比較的静穏な主人公の追憶の独白であるのに対し、他方の作品の終局は狂乱に近い主人公の痛ましい姿と惨めな彼の内部世界の描写である。“too late” “the waste of life” という idea をテーマとした James の作品は、長篇、短篇を含めていくつかあるが、“The Beast in the Jungle” は、この種の作品群の中でも特異なものである。というのは、この作品の中に James の自伝的側面、あるいは作者の直接の経験的要素があるのではないかと推測する批評家たちがいるからである。それらの批評家の名前をあげる前に、作品批評の一つである伝記的批評 (biographical criticism) について一言する。

作家が彼の実際の体験を作品の一部に利用する例は少しも珍らしくない。その体験が外部的な事件であることもあれば、作家の内部の心理的経験であることもある。特に心理的経験は外部的経験よりも一層多く利用される。芥川竜之介は彼の随筆の中で次のように言う。「僕も告白をせぬ訳ではない。僕の小説は多少にもせよ、僕の体験の告白である。」これは作品が一見すると虚構の物語のように見えても、実は偽装され、あるいは変容された作家の告白であることを言うのである。作家は自分の体験を生のまま作品の中へ持ちこむことをしない。外部的、内部的の何れにせよ、作家の体験は metamorphic process (変容の過程) を通して作品という最終成果 (end-product) に結晶する。

上述の作家の体験と作品との関係から作家の伝記あるいは自叙伝は、作品の解釈、解明のために

有効な手段となる場合もあり得る。それ故に伝記的批評は作品批評の一役を果すことになる。この方法は時には憶測、独断におちいる恐れもあるが、的確、妥当に用いられるならば興味ある批評文学を生む。

James の作品の中でも特異な小説 “The Beast in the Jungle” については多くの批評があるが、私はその中からこの伝記的批評の例を示そうと思う。その一例に Leon Edel の批評をあげる。Edel は James の長い作家生活の中で彼に大きな shock を与えた体験を指摘する。それは James の友人 Constance Woolson の自殺である。ここで Woolson の略歴を紹介しておく。

Constance Fenimore Woolson (1840—94) — アメリカの女流作家、短篇集の外に長篇作品があり、カロライナ州、フロリダ州、その他の地方色を描いて注目される。1870年代の終り頃まで上記の州で暮し、後にヨーロッパで生活する。James の友人であり、互に信頼と尊敬をもって交際した。ただし、両者の間には恋愛関係は全くなかったと言われる。なお付記すれば彼女は聴覚の重度の障害者であり、独身孤独の生涯を送った。彼女は1894年1月、Venice において謎の自殺をとげた。

Leon Edel の James 評伝 (全五巻) によれば、彼女の死の報を受けた時の James の驚きは大略次のように記述されている。James は彼女の死と、葬儀が Roma で行われることを聞き、直にイタリアへ出発する用意をととのえたが、それに続いて彼女の死が自殺であることを聞き、にわかにイタリア行きを中止した。しかしその年の春には Roma の Protestant の墓地に埋葬された彼女の墓に詣でている。Edel の作品評は James 評伝の中にも詳細に述べられているが、ここでは、彼が編集した *The Complete Tales of Henry James*, Vol. 11 の introduction の一部を引用する。

“The Beast in the Jungle” belongs to a group of tales which depict the isolation of the individual in a great cities, and his inability to understand or even reach out for love. ………

The tale has its autobiographical side. James had known a woman and taken her friendship, and never allowed himself to know her feelings. She was kind and interested — and he had

never imagined an interest beyond friendship. In the end she had taken her life, one winter's morning in Venice, in great loneliness and melancholy. All this had happened a decade earlier, and out of these sombre memories James seems to have distilled the essence of “The Beast in the Jungle.” It is a story of an unlived life ; and of a man who loses the love he might have had, through selfishness.

次に他のもう一人の批評家の伝記的批評を紹介する。Dorothea Krook は “The Beast in the Jungle” が *The Ambassadors* と同じ年、1903年に制作されたことに注目し、Marcher と Strether (*The Ambassadors* の主人公) の人間像の類似を指摘する。James は彼の若い友人、Jonathan Sturges が James に語った W. D. Howells (James と同世代のアメリカ人の親友である小説家) についての逸話、すなわち Paris に滞在中の Howells が Sturges にもらした嘆声 — “…… you are young,…… be glad of it. Live all you can : …… I haven't done so — and now I'm old. It's too late.” を聞き、深い感銘を受けこれを彼の創作ノートに記入する。(Oct. 31, 1895) その後この逸話は Strether の人間像造形の germ となって作品化され、彼の代表的長篇小説 *The Ambassadors* となる。Krook は両作品を比較対照して次のように言う。

……the central experience of “The Beast in the Jungle” was perhaps nearer to a direct autobiographical experience than that of *The Ambassadors* …….

Krook の批評は Woolson の自殺も、Howells の嘆声も James に impact を与え、両者共に彼の作品の germ となったが、前者の場合の impact は後者の場合のそれよりも、はるかに強かったことを意味する。それ故に作品においても Marcher の悔恨 (remorse) は人生の浪費と喪失の自覚や反省によってはつぐなうことのできない程に苛烈なものになったのである。

最後に James の文体について簡単に述べたい。彼の初期の文体と後期のそれとの間には大きな差違のあることは周知の通りである。初期の文体を一言で評すれば a style of simplicity and elegance と言えよう。これとは対照的に後期の文体はいわゆる involved style (複雑難解の文体) である。それは読者が作者の意図を速やかに理解することをはなはだしく妨げる。批評家も読者も彼の後期の文体、特に彼の adverbial interposition (副詞語句、副詞節の挿入) の過度の使用には、必ずしも賛意を表すとは限らない。この否定的意見に対する James の答は “Adjectives are the sugar of literature and adverbs the salt.” であったと伝えられている。(Theodora Bosanquet: *Henry James at Work*.) 彼の後期の作品を読む

読者の感想は、彼の文章の中には qualifying clause (限定文節) の多いこと、したがって必然的に長文とならざるを得ないという印象である。文章は限定的な副詞語句、副詞節を用いることによって精緻な表現を獲得することは、修辞学の教えることであるが、その使用に限界のあることは言うまでもない。James は表現の精緻を望む余りこの限界をこえたと見るのが至当であろう。James が後期の独特の文体をいかにして創造し、何故に自信をもってこれを駆使したか、その理由については批評家の間にいくつかの異論があるが、ここではそれに触れない。第二次大戦後、James の作品と彼の小説美学は、作家としての彼の revival 現象をひきおこした。批評家と文学史家、少数の熱心な彼の愛読者 (the passionate few) は今後も彼の作品を読みつづけるであろう。

(昭和58年12月25日)